「鳥取開墾社」広谷原入殖に関する基礎史料

—その2 広谷原の諸原野図について—

狩野勝重 —*1 松井壽則 —*2

キーワード：
鳥取開墾社, 安積開拓, 広谷原, 原図, 測量図

Keywords:
Tottori reclamation company, Immigration at ASAKA wildness,
KOUYA-wildness, Original figure, Measurement chart

A RESEARCH ON HISTORICAL DOCUMENTS OF OLD TOTTORI FEUDAL CLAN MAN'S FAMILIES NAMED TOTTORI RECLAMATION COMPANY, IMMIGRATED TO KOHRIYAMA WILDERNESS IN FUKUSHIMA

—Part 2 On some uncultivated field charts of KOUYA-Wildness—

Katsushige KANO —*1 Hisanori MATSUI —*2

We have some uncultivated field charts of KOUYA-Wildness in Fukushima prefecture. One of these, Measurement Chart of KOUYA-Wildness, was used as master figure of other charts. ASAKA Agricultural Rainwater Management Office now owns this one.

In this report, these charts are compared with the current appearance of KOUYA-Wildness. As a result, it has known that the state at immigration is explained well, in the current appearance.

初めに

「鳥取開墾社」が現在の福島県郡山市喜久田町周辺の広谷原に入殖を始めたのが明治十四年（1881）四月のことである。

それに先立って明治十三年（1880）五月、松方正義内務卿に東京へ呼び出された今井鉄太郎は、その足で福島県に赴いている。その時、最初に入手した絵図が『明治十三年六月 安積郡諸原野起業水利線路之図』^{註1)}であり、それを基に現地を踏査した結果、明治十三年（1880）七月、広谷原への入殖を決意するが、その時の様子を今井鉄太郎は『移住開墾願』（『鳥取開墾社関係文書』）の中で次のように報告している。

本年五月該地二趣キ親シク諸原野ヲ巡視仕候処 原野位置之便宜ナル 地味之豊沃ナル実ニ快壮ナル移住之年ヲ攬スルノ土地ニ有之候 依而該地ニ移住シ 勉強耐忍シテ開墾ニ従事スレバ 六七年ヲ出ズシテ有産自立之良民トナルハ疑ヲ容レズト自信仕候ニ付 別紙規則書ニ照準シ 同ジク費目表之通り御保護ヲ仰ギ 鳥取士族中有志之者ヲ率先シ 前頭対面原及ビ他諸原野之中ニ移住シ開墾ニ従事仕度存奉候間 特別ノ御詮議ヲ以テ 至急御許可被下度 此段願奉候也
(段落は狩野による)

その後国許で「鳥取開墾社」を設立し、『移住開墾願』と共に提出した明治十三年七月の『開墾規則』（『鳥取開墾社関係文書』）によれば、とりあえず明治十四年（1881）三月に安積開墾地に移住する者を50戸と定めている。その内、『開墾規則 十三条』では、50戸の中から抽選によって定められた5名の委員のうち3名は、

移住ノ前年ニ該地ニ趣キ、耕宅地ノ請取方、室屋建築等ノ事ヲ周旋シ、及ビ米塩炭薪等買入ノ事ヲ調理スベシと規定したことにより、明治十三年十一月には入殖準備

のために今井鉄太郎、坪内元暁、仙石吉衛の3名が先駆けて当該地へ赴いている。その後、明治十四年三月までの間に「耕宅地の請取方」や「室屋建築等の事を周旋」するための福島表と国許の遣り取りが行われることになる。本稿で取り扱う史料は、『第四十九号 諸絵図面類 鳥取開墾社委員』（明治十四年四月 『鳥取開墾社文書』所収 郡山市 宇倍神社蔵・開成館収蔵 整理-No. 29 袋共21葉 縦約37.0cm横約18.5cmの和紙袋入）^{註2)}中、この時点で家宅配置検討のために用いられた概況図^{註3)}の元図になったと思われる絵図であり、更にその元図の原本となったと推定される測量絵図^{註4)}について、その作成時期と「鳥取開墾社」入殖計画との関連性を検証するものとする。

【1】『廣谷原略図』について

〔図-1〕『廣谷原略図』横43.0×縦24.5cm

『第四十九号 諸絵図面類 鳥取開墾社委員』の中に

*1 日本大学工学部建築学科 教授・工博
(〒963-1165 福島県郡山市田村町徳定字中河原1)

*2 日本大学工学部建築学科 助教授・工修

*1 Prof., Department of Architecture, College of Engineering, Nihon Univ., Dr. Eng.

*2 Assistant Prof., Department of Architecture, College of Engineering, Nihon Univ., M. Eng.

は、「廣谷原略図」と絵図中に記された着色絵図が2葉と、表題がない下描着色絵図が2葉含まれている。何れも筆跡から同一人物の手になるものと思われる筆描のものであるが、下描として鉛筆が用いられている部分もある。これら4葉の絵図は基本的に同一内容で、本稿では最も内容の整った絵図を『廣谷原略図』[図-1]として採り上げる。何れも下向きが北を指すように描かれている。

本絵図には年季が記載されていないが、明治十三年十一月から明治十四年三月までの間にあって、福島表と鳥取国許との遣り取りに用いられた書類を集めた『第四十九号 諸絵図面類 鳥取開墾社委員』に納められたもので、その時点にあって最も詳細な原野絵図と推定^{註5)}される。

本絵図の記載内容は、ほぼ中央部の八俣堀を中心として堀ノ内四号の堀と原野内四本の道路ならびに字界と各村持地内段取線が描かれており、官地、林地及び細い鳥の爪状の耕地などが区別されて描かれている。また、絵図右上の部分には、

八山田部内反別 五十七丁〇四畝廿七歩
堀ノ内 々 々 六十二丁八反六畝二十歩
早稲原 々 々 二十八丁一反四畝〇二歩
合計 百四十八反五畝十九歩
富田部内総反別

百三十四丁二反八畝一四歩

のように、各村持地の面積がそれぞれに記されている。この絵図から、広谷原の殆どが官地ならびに林地で、既存耕作地はほんの僅かしか無かったことが知られる。即ち、猪苗代疏水の完成なしには安積原野における土族授産事業は考えられない状況にあった。

ところで、本絵図における早稲原村の字界付近における曲線の描き方は、同文書中に納められた『配置計画草稿絵図一〜三』(仮題)^{註6)}とよく一致していることが確認される。恐らく、広谷原北端の字界線だけが写し採って、『配置計画草稿絵図一〜三』の検討に用いられたものと考えられる。即ち、当初の移住計画において、50戸の移住地を、広谷原と堀ノ内村ならびに早稲原村および日和田村との字界部分に限って認めたことを意味している。

なお、明治十四年五月に東京に出向いた今井達がその足で福島入りをした時に、彼等を広谷原に案内したのが堀ノ内村の佐久間虎吉、大谷地の國分佐次兵エ、八山田村の佐々木利十の三人であった。その時に説明資料として用いられたと思われる『安積諸原野調査一覧』(仮題)(『第四十九号 諸絵図面類 鳥取開墾社委員』)^{註7)}によれば、広谷原における家屋の政府による計画当初の建築見込み数は365戸であったことが知られる。その後の協議の結果、広谷原の北半分を「高知開墾社」、南半分を「鳥取開墾社」にすることで決着したようである。「高知開墾社」の広谷原移住は明治十四年一月に始まっており、「鳥取開墾社」の移住開始よりも3ヶ月程度早い。また、明治十三年十二月には「高知開墾社」の入殖地の決定をみていることからすると、本絵図の作成時期は同年の十一月から十二月の間ということになる。

その後、移住士の敷地選定、住居の規模等が検討されることになるが、移住者および移住地決定までのプロセスについては、『社中規則並ニ申合書類』(『鳥取開墾社関係文書』)の「申合せ目」によって、先ずは「原野図

面によって吉衛、元興の居地を定め」、その後「籤引きによって移住士の宅地と屋敷を示談」し、「その結果を福島に報送」することとされていた^{註8)}。

【Ⅱ】『家作宅地描き込み最終絵図』(仮題)について

[図-2]『家作宅地描き込み最終絵図』(仮題)

横約 28.0×縦約 36.0 cm

本絵図も『第四十九号 諸絵図面類 鳥取開墾社委員』所収の1点で、表題・年季ともに欠くが、広谷原中心部の状況を捉えており、固マ土境界線(高知・鳥取分線)および新たな追加30戸分の22宅地までが描き込まれている。追加30戸分の宅地は一番から十六番までが堀ノ内四号地内に予定され、広い耕作地を確保することが優先された配置であったことを思わせる。少なくともこの絵図は、当初移住予定の48戸及び追加30戸の移住士住宅群の広谷原全体における配置計画として描かれており、福島表と未だ鳥取に在った「鳥取開墾社」との遣り取りの最終段階に位置付けられるものと推測される。

また、本絵図には「磐城ヨリ新潟ニ達スル新道」の書き込みが見られ、突然のことで対応し切れなかったものであろう。傳左エ門原の二列の家並みを分断する形となっている。この磐城ー新潟新道の計画決定がなされた時期と追加30戸分の決定をみた時期とはほぼ拮抗していたものとみられる。この新道の決定は明治十四年一月^{註9)}のことであり、追加30戸が福島県から認められたのも同年同月であったというから、本絵図が作成されたのは明治十四年一月以降ということになる。本来ならば、『配置計画草稿絵図 三』の段階において新道予定路線が描き込まれていなければならない筈であるが、何も描き込みが見られないことからすると、当初50戸の敷地に関する配置計画を終了する時点まで、新道建設の予定は「鳥取開墾社」には知られていなかったという状況も想定される。結果として新道に掛かる移住戸4戸分については広谷池南西の新道沿いの松ヶ作に移されることとなったという事情が本絵図によって推測し得る。

当然のことながら、明治十三年六月の『安積郡諸原野起業水利線路之図』作成の時点では、この新道は明らかにされていない。

【Ⅲ】『福島縣岩代国安積郡廣谷原略図』(郡山市 安積疏水土地改良区蔵)について

郡山市安積土地改良区の事務所には安積諸原野の各原

〔図-3〕『福島縣岩代国安積郡廣谷原略図』

横約 112.0×縦約 57.0 cm

野測量図が保管されている。本絵図はその中の 1 枚であり、約 1/1000 の縮尺で、十尺グリッドに描かれたものと推定される。何れの絵図も南が上に描かれており、現在の作図規定には当てはまらない。また、何れの絵図も年季を欠くが、本絵図中には、磐城一新潟新道が朱書きされている^{註 10)} ことからすると、新道の計画決定を見た明治十四年一月前後に作成されたものでなければならぬことになる。

絵図中の凡例によれば、『廣谷原略図』〔図-1〕と同様に道路を朱引線で、既存耕地（古田）を黄色で、池堀を青色で、林藪を深緑で、地元人民への貸下地を茶色で表示し、残りの白地を官有原野としている。当時の広谷原は、この絵図が示すように、一握りの古田を除けば、その殆どが耕作不能な原野であり、林藪さえもほんの僅かに過ぎない。何故当地に調査に赴いた今井等が「地味之豊沃ナル実ニ快壮ナル移住之年ヲ攬スルノ土地ニ有之候」と判断したのか、了解に苦しむところであるが、『安積諸原野調査一覧』に「地味ノ善キヲ〇點五トス」として〇四つ半の評価が印され、また周囲藪林に関して「多キヲ〇點五トス」とし〇四つの印とされているように、明治十三年六月の段階でこれと同様の説明が為されていたであろうことも想像に難くない。しかしながら、明治十三年十一月の「国会開設期成同盟第二回大会」に出席しそのまま今井鉄太郎、坪内元暁等と共に広谷原に入ったとされる仙石吉衛も、その地における農業経営の苦しい実態を目の当たりにしていた筈であるが、何故かその後も地元鳥取との連絡係を務め、授産士族の移住の腐心に努めていたという事実を考えると、最終的には、既に鳥取では自由民権運動を標榜する士族の中心的存在であった共立舎の一員として政治的にも行き詰まっていた今井等一統の「猪苗代疏水の開通に寄せた最後の存在基盤」ということに尽きるのではないかと推測される^{註 11)}。

ところで、これまで検証してきた『配置計画草稿絵図一～三』ならびに〔図-1〕の『廣谷原略図』と〔図-2〕

の『家作宅地描き込み最終絵図』の描写を比較してみると、何れもこの『福島縣岩代国安積郡廣谷原略図』を原本として、〔図-3〕中央の凹み部分を挟んだ左右の字界線部分を描き写したものと考えて間違いない。視点を換えるなら、先発隊が開拓事務所で打合せを始めた十一月頃には、『福島縣岩代国安積郡廣谷原略図』の概略は完成していたとみるべきであろう。

【IV】広谷原の現況と『福島縣岩代国安積郡廣谷原略図』との比較

〔図-1〕の『廣谷原略図』および〔図-2〕の『家作宅地描き込み最終絵図』と〔図-3〕の『福島縣岩代国安積郡廣谷原略図』を比較してみると、何れの絵図もその内容はよく一致していることが判る。そこで『福島縣岩代国安積郡廣谷原略図』を基本として平成七年二月国土地理院調整の 1/2,500 都市計画図における現況と比較してみると次のようなことが判る。

- ① 「磐城一新潟新道」は現在の荒井一郡山線で柳池の脇で屈曲。
- ② 最大の溜池である広谷池は現在の八俣堀。
- ③ 広谷池の北東部で交叉する旧道は、交叉する周辺から西行き堀ノ内原まで、南行きの殆どが現存する。
- ④ 堀ノ内原と傳左エ門原の敷地割および居住地区内の道路、並びに、両地区を結ぶ開拓道路はほぼ当時のまま現存。
- ⑤ 節上原については、移住に伴って新道が開設された可能性が高く、それが現状の街道となっている。
- ⑥ 「鳥取開墾社」の移住士住宅 50 戸が計画された土地は、現在の郡山市喜久田町南東部、同市富久山町八山田との字界線近くに位置していたことが確認される。
- ⑦ しかしながら、節上原北方は耕地整理がなされた結果、早稲原へ通ずる旧道は殆ど失われている。
- ⑧ 更に、堀ノ内原から節上原へ導かれる猪苗代疏水線（波線）も現存する。推定字界線は一点鎖線で示す。

〔図－４〕平成七年都市計画図上と移住時の比較図

このように、明治十四年（1881）の「鳥取開墾社」移住時に整備された宅地割付ならびに道路の割付け、さらには猪苗代疎水線の基本的部分は現在も当時のまま遺されていることが判る。

結び

以上、本稿では、『第四十九号 諸絵図面類 鳥取開墾社委員』に納められた『廣谷原略図』および『家作宅地描き込み最終絵図』（仮題）と安積疏水土地改良区所蔵の『福島縣岩代国安積郡廣谷原略図』の関係を明らかにした。なお同年一月までの間に各地区毎の配置計画を終え、建前の順番の検討、更には傳左エ門原における道路割付および耕地割付についての検討がなされていた様子が覗えるが、それらについては稿を改めることにする。

なお、本研究は、すでに報告済みの『「鳥取開墾社」の安積原野入殖史料について』（建築学会大会学術講演梗概集 2002 F2 p 443-444）の内容を更に詳細に展開させたものであり、日本大学工学部建築学科松井壽則助教授、同土木工学科藤田達之教授、同知野泰明専任講師を含めた4人による共同研究の一環であることを付記しておく。

補註

註1) 『「鳥取開墾社」広谷原入殖に関する基礎史料—その1 入殖予備調査史料について—』（日本建築学会技術報告集 2003.12 pp.363-366）において紹介済みであるが、等高線図ではなく、ケバ図で描かれている。

註2) 明治十三年十一月から翌十四年三月までの先発隊による移住準備記録が一袋に収められているが、その期間に福島県

との入殖事務手続きが進められ、建物の配置計画から建前順まで決定していたことが知られる。

註3) 『「鳥取開墾社」広谷原入殖に関する基礎史料—その1 入殖予備調査史料について—』（日本建築学会技術報告集 2003.12）において報告をした『配置計画草稿絵図一〜三』（仮題）の原図を意味する。

註4) 安積疏水土地改良区（郡山市）には安積郡の各原野の測量図が多数保管されているが、「鳥取開墾社」の先発隊が安積原野に赴いた時には既に測量を終えていたものと思われる。

註5) 「廣谷原略図」と書かれた絵図がもう1枚存在するが、その絵図には部内反別の面積が書込まれていないので、本絵図の方を採り上げた。

註6) 註3)に同じ。

註7) 表題および年季を欠くが、14におよぶ安積原野について、それぞれ郡名、段別（反別）、地味、地形、隣村距離、水田、周囲藪林、家屋（予定戸数）、風力気候、水保、案内人名等の調査結果が一覧表とされている。

註8) 註3)における『配置計画草稿絵図一〜三』（仮題）はその過程を示している。

註9) 『郡山市史』による。

註10) 本絵図に「磐城一新潟新道」という名称の記述は無いものの、『家作宅地描き込み最終絵図』の「磐城ヨリ新潟ニ達スル新道」と見られる書き込みによる。

註11) 明治七年（1876）に旧鳥取藩主池田慶徳の寄金により設立された共立学舎の一員であった今井鉄太郎は、明治八年二月に大阪で開かれた全国民権運動の結社である愛国社設立に参加している。しかし、その後の民権運動の拡がりには、明治政府の悩みの種となったという背景がある。

〔2004年3月4日原稿受理 2004年7月29日採用決定〕